

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	日入るまで : 文苑
Author(s)	蜉蝣生
Citation	龍南會雜誌, 129: 32-40
Issue date	1909-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6202
Right	

(六)

師走から正月は、何となく忙しい爲に、其塵事も忘れて居た。春になつて自分は都合上巢鴨近くへ引越した。

何時か霞が消れて花が散つて、若葉にそゞく夜の雨に、又五位鶯がなく頃となつた。又過ぎ去る夏の夜の、山里の女を思ひ出すと共に、指物屋の女房を思起した。山里の女と、指物屋の女房とは何だか同じ運命の糸に操られて居る様を氣がしてあらぬ。

友は指物屋の女房を、芝又の川甚かわじんで見たと云ふ。川甚の下女頭をして居るらしかつたをうだ。自分ぶんはふと山里の女を連想して、彼の女も小利根の夜霧に落ちかゝる月に對して、死にたいと思ふ事があるだらうと思ふ。

其後小母さんの説に依ると、行徳で世帯を持つて、面白く暮してると云ふ。

『如何だ。 can one love twice? は』友に云ふ。

『彼塵社會は例外さういふ……』と笑つて横を向いた。(了)

(二月三十一日稿)

日 入 る ま で

一年の暮の或夕方であつた。

灰色の雲を煤煙ががすめて、夕日に追はるゝ人も車も、皆町の方へと急ぎ足にすぎゆく。一息きか騒がゝかつたブラットホームも、四時半の急行列車が、出る丈けの人を吐き出して、ある限りの客を呑み込んでしまうと、又元の静けさにかへつて、唯出發の合圖を待つて居る。渠は友と向ひ合ひに席を取つて、先づ煙草を吸ひはじめた。離愁の名残をあくまでも惜むべく、夕日の入り切つてしまふまではと、遠くゆく友を送つて來たのである。と漁笛が響いた。幾多の人の喜びと悲しみとを乗せた汽車は、四邊の空氣の沈黙を破つて動き出す。二人は唯黙つて居る。

渠は突然友は病める人だと云ふ事を思ひ出す。あゝ大の生涯が、生れて、年を取つて、働けなかつて死ぬと云つた風に、いのもすぎてゆくものであつたらば、何事も思ふ事とはない。けれども我れ等の長き旅路の終りにあるまでは、幾多の障害と苦痛とが秘んで居るものだ。丁度あの静かで、時に波瀾を捲く海のように、人生は限りなき憂悶の主とある事がある。然り海は鏡のやうに静かかものだ。しかも人生の海に舟出して、我等の乗れる小舟の下には、底深く秘める、朧々る異形のものよ、うごめくのが見ゆるではないか、——病、苦、誘惑、患難。或時は怒焉と浮び出づるかと思へば、又忽焉と水底に沈んで影も形も見なくなりてしまふ。そして朝に夕に、我等を飄弄して止む時がない。けれども、いつかは運命の日の、此の小舟を覆す様を時が來なければならぬのだ。

渠はふと友を見る。友は上窗で唇を噛んで、外套の襟に腮を埋めて、兩手は固く膝の上に握り、あたまも、渠の胸のあたりを見つめて居る。痛ましき頬の瘦せやうやど、果敢なき友を思ひやつて、

渠は思はず裏を隠れたが、再び仰いだ時には友の目は涙がこぼれはいつて居た。

流車はかまざる冥想の間を用捨なき進んで、四邊が急に暗くなつた、今山の峽に入つたのである。

『「アステルがもし手を持たずに生れたら、あんな大美術家にはあられあかつたらうが」』

と突然友は思ひ出した様を事を云つて、渠の顔をむつと見る。

『「天才容易く端倪すべからず。何だつて妙の事を言ふぢやないか。」』

渠はこう、當つた様な當らぬ様な答へをして、一息煙をふくと吐く。煙は玻璃窓に行き當つて、ただ廣う廣がるど、はね返つた様を余勢が渠の顔にかゝる。渠はつと身を起して窓に凭りあが意外を見る。峽と行つても、少しも狭くはない。松林と畑地と、農家とが、いと具合に点綴せられて居る。盆地の底にかつた小廣い所で、静かな黄昏の霧がこよの森、かしの丘から立ち上つてゐる。此の様を静かな空氣を、流車が攪きみだしてゆくのが惜しまるゝので、渠は目を上に反らす。前の處は丁度山と重なり合つて居る、少しく低くあつた所なので、段々畑の上に、柿の枯木の寂びしげに立ち並んだ間から海が見える。海！ 静かある！ 冥想の果ての海はあゝ静かではあかつたが、今見るそれは鏡のやうだ。花やかに落日のかけを水にうかべて、沖は晴るゝ事三十里、一蘆の水を渡るべき影だに見ゆぬ。

渠と思ふ間に早峽を出で、今水清き大川を渡りつゝある。咲きては散らん浪の花の、磯邊に白き大濱の松に、よする思ひのしらべは何。芙蓉も人の世の花はされど薊も又人の世の花である。水は永久の藍を流して、渡るに清き此の川も、やがて大海の潮響からまにさすらふのではないか。此の

川下は友のゆく手である。

瀟車はやがて、そが蜿蜒たる歩みをゆるめて、川に添つた小さき町の停車場に着く。主人は下りて下りた。

二

大川に注ぐ里川堤の、枯草の色を染めた夕日のかげは、いつしか前山の左肩に姿を埋めて、川下の松原も靄こむる頃である。

渠は友に別れを告げて惆悵と唯一人立つて居るのだ。

「日入るまで」

ど、交した言葉の時は今なのである。

殆んど平行に走つて居る土手の上の、並木にあつた櫟の木が、赤裡々の姿に見透いて、その間を車で迎る友のかげは、あらばに渠の眼に映するのであるが、それも少時で、やがて常盤樹の繁みに入ると、それから先は靄にどなこめられてしまふのだらう。丁度晚鴉のなく聲が、静かき空気を傳うて來る轍の音と、錯雜つて渠の耳に響く。渠は唯化石の様に立つたまゝ、その音のする方を見詰めて居る。勿論一語をも發せぬ。

ど、友の車は渠の視界を去る唯一歩の所まで來た。渠は思はず二三歩前へよろめいて、又そのまゝに立ち停ると、目に二筋の涙の糸がかつて居る。

車上の人は見がへつて白きハンカチーフを打ち振つた。

返照は全く西の空に消れて、月が出る。枯木の上に變らぬ姿を表はした時、冬でもその色はやはり黄いかった。

あゝ夢のやうに友は去つたのである。

三

渠は、かへらぬ波の後を追ふて去つた友の上を思ふ。夢に似し夕の様？ 唯悲しど計りではあるまい。然りうすかりし縁を泣くのではない。

越へて五日。渠はなつかしき友からの書を受け取つた。

封筒の下の方を缺で丁寧に切つて、それを火鉢の中へつと投げる。途端に煙が立つて、やがてポツと云つた様な風の音と共に、燐が一しきり閃めくと、すぐ灰になつてしまう。渠はそんな事に構はずに、中から手紙を出す。右手で持つたまゝ、膝を一寸左へ——火鉢の方へ——向け直して、片手でサラリと開く、膝を走つて半分は畳へ、延さは長さは丈にもあまらう。

君よ。

黄昏の別れは深き深き印象を残して、僕は永久に忘るゝ事が出来ぬ、空山一路の春の花が、幾度どかく咲いて散つて、億劫の末に僕は又君に逢うのだ。現世の四年は決して長かつたとは思はぬけれど、我れ等の交りは時間の上に超越して居たのではないか。銀杏散る古城の畔りに、泣いて互の總てを打ちあげたのは、今日の様に夕日の花やかな折であつた。幾丈の石垣の上に、赤裸々の大樹

が聳つて、落葉がその高き壁の半を黄に染めたのを仰いで、君は男兒の最後の潔きに比し、僕は女の花やかなる生涯を思つた。君と僕と性情斯くの如く相容れざるに、しかも交りの水魚も畜な身がかつたのは、蓋し怪しむに足らぬ。一片の知己が互に二人をして忘るゝに忍びざらぬのであつた。あゝその夜、君が零落の家の子を憐れめど泣いた時、僕は母を我が爲めに哭せよと叫んだ。人の血を吸つて笑ふ世に、狂熱君の如きを得て、實に僕はうれしかつたのであつた。その時の印象は同じ影を再び黄昏の別れに僕の心に映したのだ。夢の様を過去を辿つて、現在の我れに觸れ、更に未來の悲しきに思ひ至つた時、沈黙の別離は一層僕に取つて、悲慘の種となつたのである。

君よ、僕の過去は花やかであつた。しかも未來は暗黒である、此の兩者を繋ぐ運命の糸は、列車が出發の汽笛を吹いて、寒風の中の都市に僕が最後の一瞥を與へた時であつたのだ。君の最親じき友が終生の戀を葬つて、絶望の生活に入るべく志ざした日を忘れ給ふな、然り詩があつた、戀があつた、君來すは聞へも入らじ濃紫、その彩色の様なあ、戀もあつたのだ、けれども、行樂の美しく夢は一朝の嵐にさめて、蝶の秋の寂しさに病み、花は天上の園にかへる、あゝ僕は病んで去らねばならなかつたのである。永久繋ぐべき緑の糸を我れから截ちて、

僕の故郷は君の知れる通り海濱である、僕の好んで夕ぐれにさまよふは砂丘の頂だ。海を見下して、一つづつよせては碎け、碎けては去る波のゆく手を見送つて居ると、ふとこの夕ぐれの様が目に見ゆる。君よ、峽の間から見わたす海は遠淺だつたが、こゝは遠く冥府まで通つて居る様に深いのだ。その鏡に映つる事もやと思ふ、果敢なき頼みの果を、想像で画く人の姿に流す涙は、僕が醜

骸を此の上に埋めた時に潤るゝのたと思つてくれ給へ。

君よ。僕の村は非常に寂しいのだ。こゝに來てから一週間になるが、聞ゆるものは、ちと古いが波の音と松のひびきと、唯それ丈けにすぎぬ。

大空をべた一面に灰色の雲が塞いで、その裂け目から傾きかけた冬の日の弱い光りが洩れてくる。丁度左手の痴人のやうな巨巖のつき出た側を、果ての力で真向に照らしては居るが、深う凹んだ所までは手が届かぬのであらう、班の色の寒げに見ゆる、潮の香をむかへうよせて、風が一陣颯とたこる、と思ふと又起る。時をきざんでのべつに起る。そうして、余勢はたもむろに茂る松の間を、近き村の方へとわけてゆく。梢に高きその韻の、消むゆく方は何處であらう。見よ、満ちがけの潮はひた／＼と岸を洗つて、果ては遠く、花やかに染めあす夕ぐれの雲に連る。實にさびしいのだ。友よ。けれども僕は寧ろそれが楽しいのだ。波の女を隔つる幾山河の地に、浮世の戦に傷ついた殘骸を横へ得るのがうれしいのだ。人の心の最いたましい運命は、そが親しいものに別るゝのを樂しむ事であるとしても。逢遭成りがたき世の遠くて、朝夕觀念のたよりに全しからぬ今の境遇が、僕の得べき幸福の唯一のものではあるまいか。けれども僕は落膽はせぬ。思ひをやるべきよすがもある。更に命に代ふる命もある。況んやたとへ世が此まゝに僕を永久に忘れてしまつても、彼女はとも一度心の底に深う刻まれた、悲しみの中に秘む樂しみの印象を忘れ去る事は出来ぬのではあいか。木枯すさぶ古城のほどり、霜白く置く橋の袂、馬糞の風に身を曝しても、僕の名を記憶の中から拭き去る事も永久に出来ぬのであいが。要するに、よゝ第三者が勝手に想像する利害論はごうな

情が最後の勝利者である事をしまうとするのだ。

然り、情が最後の勝利者である。立つ波が、立つ波が、瀬々のあじろ木さへられて、堰きとむることも、通ふべき思ひの波ならばいつまでも通ふ。放たば去るとおげくは、そはいたづらの憂ひに過ぎぬ。唯昨日の花は今日の夢、驚くとも甲斐なきがくやくいのである。『夕べくの涙川』と、辻歌にききし戀の夕も、鳥邊山の初霜に、露置きそへた思ひの朝も、我れ等と同じゆめの末であつたのではないか。あゝ、さても折柄の『入日』ではある。

けれども、あゝけれども、人は何故に悲しき過去を記憶せねばならぬか、——そは唯神が知つてゐる。現在の我れを樂しむを低いと罵り得るものは寧ろ幸福だ。越し方とゆく末とそこに人生の總ての苦痛が秘んでゐる。夢と云ひ幻と云ふ、要は人が自らを欺かんとする心やりにすぎぬではないか。

友よ。今夕日は海にがどやいて居る——一朝の光榮を一夕の夢と消れてゆく蜃氣樓のやうに。僕の一生もこれである。既にそれ自身に於て美しくしき詩である。比ひなき歌である。咲き出づる花に生れて、そが香を憫れと死んでゆく俵蝶である。あまじ人間の力もて此の生を謳はんとした僕の過去は誤りであつた。賦すべき手なく、咏すべき口があつたからば運命の手に綴られた『僕』の詩は如何にうつくしかつたらう。

けれども、あゝ遂に僕は病める人である。

讀み了つて渠は撫然として天を仰いだ。

破丘の上に立てる友を思ふに、堪へ難い涙のあふるるのであらう。兩の眼より落つる涙の糸を手に拭ふて、どんよりとした冬雲を眺めて居る。

「目入るまで」

渠も又この言葉を忘ると事が出来ぬのである。

(二月三日稿)

旋

風

無

憂

「た静さん何處か悪いの？」

敷居越に聲を掛けたのは、二十二、三、色の白い、肥満した、目とか、鼻とか、一つ一つは揃つて居るが、何となく緊のあい顔の女だ。

「あゝ！」室の中からは、如何にも五月蠅と云つた様を返事が洩れた。

「そう、ちや裕然寝てるが好いは。なんから醫者を呼んでも好いが」

と云つて見たが返事が無いので、障子を締めて、二歩、三歩、歩いて「例のたは」と口の中で云つて忙しそうに段階を下りた。足音に、主人だらう帳場から圓い、肥つた顔を上げて、

「た静はまだ寝てるのかい」と聞いた。

「ハイ、何處か悪いつて！」

段梯子を下りた處で、立ち止つて答へた。